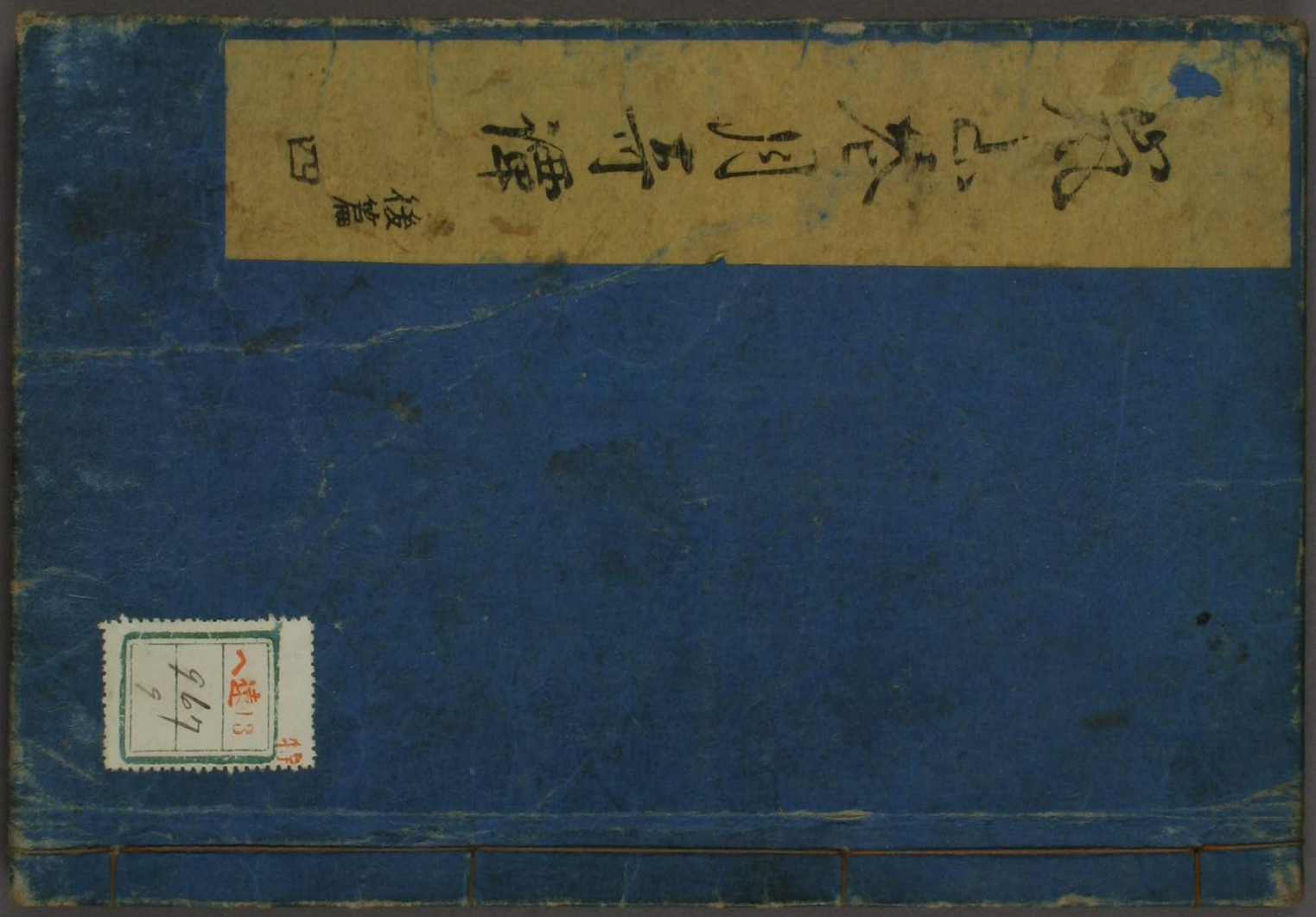
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



本清

選
帙 967
巻 9

嵐峨花月新譚巻之九

平安　瀬川恒成戯編

第九回

老女の誠練桜姫戒激す　詭

雙胎の新袴清英を驚しむ

兵面の菴ゐを挂太郎。嚴父が弟ゐを衝へ。仏中の指密をぞ遺かゝさ。縊婦しの。何者助るぞ。命ゐゝねば。切脇せんしゐ。仏庭内ゝ解らぬ。御許容下さゝぞ。大慶ゐゝ人と和演きぞ。然然ゐる父清英猶ゐら暗む眼找平さ。忠直どのと仏を会せ。

追捕人を防ぎ古乃花どのを。潮よ援けまゐらせて。拯の川の岸の柳る。其小神を拭置て。入水の体よ装待て。蒲田氏の旧臣桑六許よ匿蔵と。始て知る両人が働。古乃花どのおん在處又みも偽かくせ。大変漏さぬの金打連我子ぞ拯太郎目今汝が言しどく。蛇塚が体糸せ。重く用ん連来ると。言めを汝釣寄て。拷問せん計較ちん。徒よ賊のため。呵責受て死んよりわ。潔よく腹切死んこを増まゝめ。雨すれば側室の詮義の根も

断。我疑うん止ん。是渾殿のおん為かれば心静よ生害しぬ。父が外借仕くくせん活て生る者と。子我悲しまぬいあざて。父が用弟自殺せ。外錯をいて苦こを。釵の山も疎ろべし。侍の倚羅我飾て。いめ〳〵跨へし。此刀釵ら歃を防き。国賊我平る。具そとのみ思ひ〳〵よ。雨いあ〳〵して却よ。賊の為よ謀らせて。吾児郎乃首我切て。五十年来知〳〵ざくきと。老の悔うよ清澄も。父の慈悲心の有難泪余ニハ有て。死て〳〵を君よ忠を

立生くを父母の鴻恩ゑ。報んものを今生の遺憾を只々是一切。家ゑ居ぬさん慈母の。生害せーと聞玉ひ。左丁そを嘆き玉ふん。先主死ぬる不孝の罪も。忠義の為ぞと赦免なきと。言も涙よりもむ因ば。父ゑらせーと背面ゑ向ちきび。父親もまくを子ゑを捨ぐと。顔伐背けく酸鼻。さーらゑ猛き武士の。矢所ゑも恩愛の。別ゑゑ撓む気伐取直し。清澄を座伐居直ゑ。最期の観念尋常ゑ。焼刃直ちる魂の九寸五歩押戴脇ゑぐさと突穿ぎぞ。やゑ暫る引廻

しそ覚悟の生害急度ゑ。言遺れすあらぐ。ゑ置ふくー言へ聞んと。父の言辞ゑ桂太郎。是ハ有難き御ん命ゑ先刻言上仕。其外ゑ心ぐりをかし。両ゑぐく命ゑあまへく。只一條の願ひ有ゑ。小人生害せーと聞ゑぞ。嘆のあまり桜子も。共ゑ生害仕ん。斯くを彼家嗣子絶せん。要時ゑ間小人が。切腹の義い匿ー玉ひ。降参承知せー体ゑ。大西ゑ人知らー玉りき。兩すきび渠も得心ーを。嫁入すれが渠が為なり。許嫁有とを言ゑ。某を夫と思ひ。ゑを竭れ由

桂太夫

桂女
秋月美心
吾子を討つ

かれども。婚姻せしと訪ふてあらば。何者へ嫁ぎれても。女の道の疎るまあらば。又義理立して今死きとも。小人が爲み些とも成らば。却く絆の妨るゝん是小人が迷ひぬ潔白流石児郎よ能言たり。不和なる狂猫義理あり。余ち捨るを主君のため。助命もまゝ主君のため。夫弟の妻を心得ゝん。安く往生せよ。花を三吉野人を武士。手水なき潔よく。言どんの乱き咲き。可惜蕾の壮士を。殺し惜しさく不便さの。泪みぐゝに取上る花の小枝を糸面の菴へ。無支ぞと偽を知らしむる合図流しや

らんと縁端お。出きぞ川上より。流きく赤る桜の一枝。清英を目早く見とめく。早桜子を得ん。婚嫁するゝよ極りる。知らせの合図なりくるゝ。冥く手員を安堵の想ひ。今を心よかる夏ぶし。御苦労なるゝ御仏錯お願ひ申ますと。言ふ間も苦痛動くんと。後方に立上れど。刀を鞘よ錆付如く離き兼ねる血腥の紐。子ゝも親の四苦八苦日も西山よ春なば。やや撞出れ竜興寺の。入相告る鯨音

補行無常の響みつきく。晃々と投げ〻る釵の光て
み。首い袋みぞ落みける。斯る処へ。表の方より呼門
く来る人あり。雑ち〻んと清英を。袖引裂音子の
首級ぞ。慌忙しく押包て。泣泣ぞ払ひ庭み下〻る。
紫折戸ぞひき開き思ひがけなく大西操。娘ろ
み戸挽進て入る。清澄が兇顔を見て。愕然とうち驚
く。えや清澄い生害して。何率足下を助人とて。
桜子み種々と。利害説く蛇塚へ。婚嫁せよと勧
めしらど。先年親々約し玉ひて。清澄と云良人の

有る身。我侭みい計〻ひ難し。彼方の亭へ。連往給
ひて。兎も角も商量して。彼人ぞみ赦し玉ひて。奈何
みも命み役ふ〻と。娘が言も一理有て幸今日
を清英ぬしも。此処み在せる夏なれば互み計て
く是迄の。遺恨ぞ解く和睦して。子ども等を夫妻
とする〻く。落しやるとも偽て。蛇塚へ遣るみ
して。嫁入のとぞ味方の人々。共み郎へ責入て。本
年ぞ遂ることも。二りみ一りの商量ぞ。せんと思ひ
く来て。遅く〻残念さよ。惜る夏も有らん

うと。思ひく獨り花の枝伐。流〳〵無支伐知〳〵せし
ると。誤て秋月清英を。只黙然とさ〳〵俯伏。一切回忘
もなさでつとけり。按子を女親の。糸をも愧ぢ。首
巌を取携てとゝと泣斯有らんとを神なり。仏
るゝねぞ一点主〳〵ぞ。操伐変も公が命。助んをの
と思しを。思ひ〳〵をうとかるの。泡となりの。来て
られたゝや生害〳〵玉ふのゝう。首級も取を玉ふ〳〵
を。いとも哀〳〵き恨をなり。是伐思へば縁端より。墮
落〳〵る時を。愁を川へ沈〳〵先〳〵たゝを今の憂目

ををまぐ伝を。仇し小舟を助ら也。活存命し我命。
切い露と消をせぐ。讐る嵐を散らされし。蓉の花
の上をまる。涙の露を置をへ〳〵。いつゝ乾ん吾袂お
をへば〳〵奴家をと。幸あさをのを又もお也家尊
のをたゝや〳〵先後也幼推頃より許嫁の。良人の家
とを不和とをう。添を添を也ぬ悪縁を月下翁の
誤とと恨し時をもぐしもふゝ。今をそれさん也
野の。露ときえさせ玉ひけ。死顔さへも得もらぬを。
奈何ある糸世の報ひぞや。斯迫幸たゝさ身伐持ゝ。

活るぶ〳〵へて何ゝせん。奴家も共ゟ自害し〳〵もや追
着ん秋月ぬし。俟せ五へや清澄さゑ。母さゑ先立不
孝の罪。赦させ玉へと。桂太郎ゞ側ゟ有あゝ中ゟ追
とゝ。既ゟ斯ゝとゝえゝゝを。清英遽ゟ〳〵ぐゝ。物
ゟ狂ゝや母ゟ桜子。疑ゝ何ゟの益やゝる。斯も有ら
んと察せし。放。桂太郎ゞ最期の際ゟ。生害せ〳〵と
い〳〵ゝ。兎ゟ知し玉ひそ若此度城知ゝゝば。唯桜
ゟる活ゝゝを得ゝ。ゝゝを彼家断絶せん。先し
ゝとて吾為ゟるゝゝ。却て絆の害とやゝん。し

度の一件聞ゝけゝ。嫁嫁もれゞ渠ゞゝゝ。許婚
有とを言へどゝ。いまゞ婚姻せ〳〵ゝゝぬゞ。何氏へ婚
嫁したゝとゝ。更ゟ不義とを言ゝゝゝと。言遣し
たゝる度さへあゝ。爾ゝ浅急ゝゝ自害せゞを。桂太郎
ゞん刺。遺言ゟ背くなゝ。斯ゝも婦女の道なゝや。
とゝゝと跡先考へゝ。女後室ゟ愁嘆ゝ。ゝけぬやゝこ
そ肝要ゝれと。双奪取掻遺ゞを。操ゟ倶ゟ取携て
ゝ。清沈主を殺ゝとゝ。歌を正ゝゝ蛇塚ゝゝゟ。復
讐せんとを思ゝゞゝ。懇の度せんを。選ひのゝへ

の選ひあり。昔時左馬頭義朝の妾常磐御前が三人
の。若君のさめ操を破り。怨敵の清盛が身を任し
玉へども。後ゑ若君達成人し玉ひ。清盛一家を討亡
し。父母の恥辱を雪ぐのみならず。国家を安んず人民
の。塗炭を救ひ玉ひしと夏汝も聞く覚居つらん。其
時常盤御勲ゑ。操節を守り清盛の。意ゑ従ひ
ゑ其身を勿論。三人公子も諸共ゑ。敵の手ゑ
られて。誰か警を討者あらんや。爾是ぞ源家の繁昌
ぞ。全く常盤御の勲功ゑ。其功いとくゑ少からねば。

操を破り玉ひくも。世ゑ貞女の鑑と世う。汝も常
盤の勲ゑ学ひ蛇塚ゑ従ひて。欺き近者時を窺
ひ。夫の讐撃ち国の災除ん心を有ざるか。此一大
事を成餘処なく。死ぐ何ぞ益あら。匹夫匹婦
の尽志と言るのゑ似く。ゑゑ人笑の種と
やうん。爾い思さじや秋月大人と。雄々しき女の
言ゑ感じ。清英端英郷練者ぞ。泣顔折し桜子も。激
さ色く顔を挙。母さゑお赦免下さるぞ。大ゑ奴
家縁く作り。教ゑねども武士の。娘ゑ産者妻と

て。現在良人の讐敵撃ぶく死ぶ怎変やをあるを
奈何ぞも仰ぎ従ひく。蛇塚ぞ炊き近付。時城窺ひ
刺殺しく。良人の敵も国の讐も。一時ぞ敵ひ仕
ちんを心苦しぬ玉ふるぞや。言ぞ母親歎ぶく。
然くぐ疾く邸へ還く。其准備なんべしと。急ぐ城
清英掣逼ぬ。たやと玉ふぞ操どの。今ぞ始めぬ帰
身の雄くしさ。流石則春の後室也。又親ぞ似く令
娘の。忠貞節義の信心の。ぞあくられく壮夫も。
及びぐ怎心へ驚き入く感んせく。脊負ふぞ

教へらを。清瀬城ぞ。高綱の智をあけをどを
某も一策城備たと。席ぞ復て南玉へ。寛々と相
禪ん。そも両人の計策。悪しきぞあくねど。逆賊
の巣へ手弱き少女。只一人放ち遣ぞく。庶之近城
せんとを。石を抱きく淵ぞ臨む。夫ぞうも狂危く。
労多くして益なくん。不若先刻言ひし如く。婚嫁
の其夕。忠義の武士を相譚く。奴隷ぞ化しく。博奕
長持箪笥に擔せ往き。合図城定く時刻く。接連
く切入らを。反賊を不意城討を。狼狽騒ぎく大

るこい。物の用ゐ立をのみ〳〵ん。斯迄ど味方を倍気
城得る。右ゐ左ゐ物臥雑臥せ。悪逆不道の蛇塚ら。
首討取んを瞬く間勝利を得ん迚疑ひ〳〵ん。此
義いらぐと禪るゐぞ。操女を両手城磯とうち。此謀
計極めく姫ゐ。娘も此綱ゐ従ふだし。備今日の
返答を。如何言〳〵よかうべ〳〵ん。夫い雨そゐ計〳〵と
んと。互ゐ膝の進む城覚ず。三人額城突合せ。猶る
密度城於る時〳〵。一室の裡より声高く。宇良上
殿ゐ返ア忠〳〵。孰権城対んとい〳〵。汝等ら謀計遣

もあ〳〵窺ひ聞たり。此由往く注進せんと。隔の紙
門押開く。歳猶若紀一人の樵士。破裂る草衣を
着。浅黄の手拭肩ゐ掛け。柴刈鎌城提く。悠〳〵と立
出る。其ふさま善ら悪ら。思ひ〳〵ける紀三人を。愕
然と驚紀顧をられぐ遠ふ方ゐ紀桂を郎也人々
を再び驚紀。呆き果〳〵るでうあり。清英を身構
へ〳〵。不思議や目今死したる清沈其処ゐ姿城顕
し〳〵い。幽霊あ〳〵の備を又。変紀のるざみろ。何み
もせよ在〳〵世の。武士の姿を紀さず。職しき樵士

山人の。姿と顕色出さるる。深き所以こそあんべらめ。仏有らば詳ま言へ。たゞくを用ま物をせんべと。敦圉荒く罵迫る。彼山人い清英ぐ。茶ま低頭平身しく。諄々言訳やんよう。是所望せと。前まうけさる護身嚢渡さ出にと。よくくうれぞ清沌が。常こ紙渡敷たざる。古金爛の袋ゆう。清英不審晴やべる。ま反揚く級解ゆど。披きくうれぞ。八百万の神や仏の護符ま。涙く一枚の骨紀あり。其時をやはる浸く臨ると。去の衣の用をさせどを。

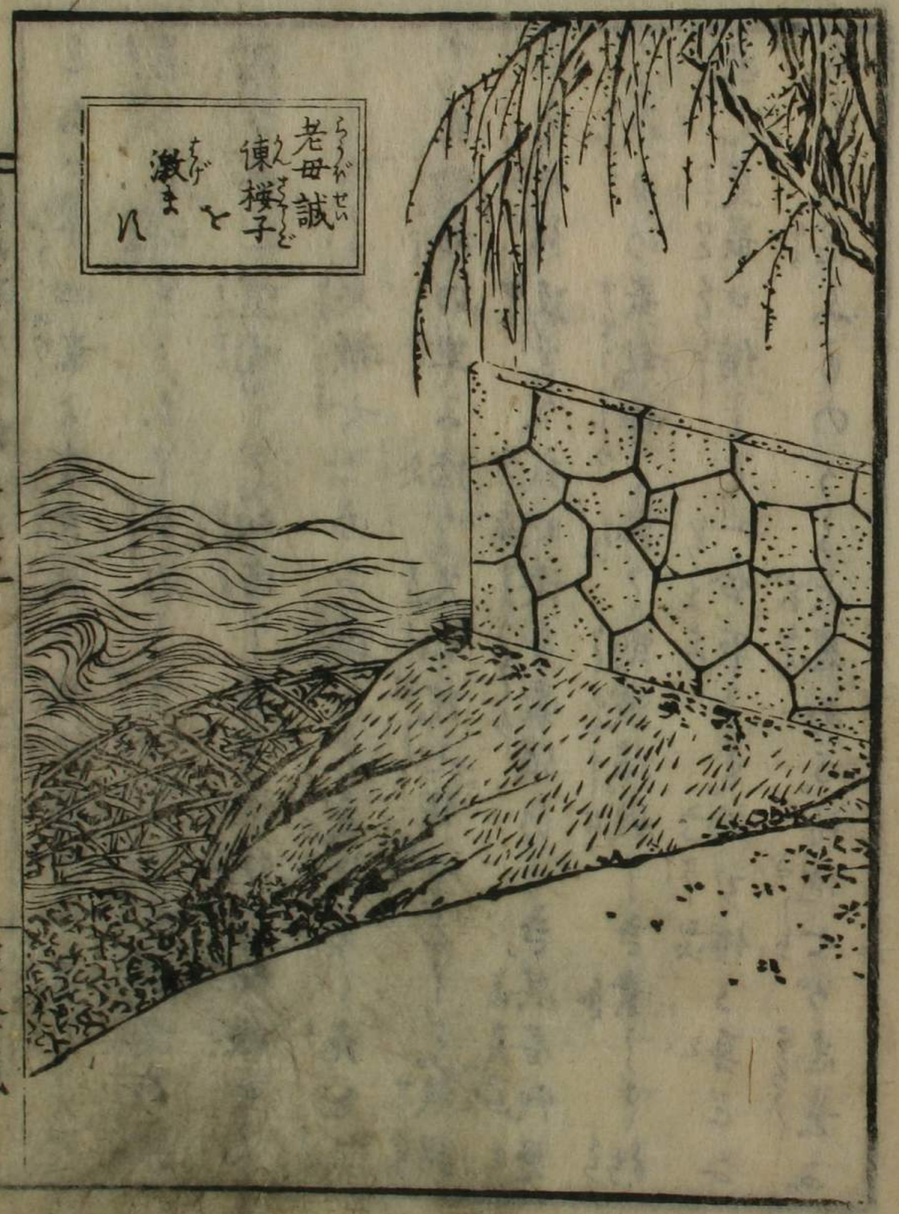
老眼ま分がさるれぞ。紙挿の眼鏡取出に。其間ま桜子を素渡わる。墨処よう火磯取出し。うち出に石の火渡。行燈まらいしくさしよすぞ。秋月桂太夫郎児拵ゆ。康正元年八月十五日誕生にと。女筆して記したて。拵ゆ分の字い異人の。浸ま昏添こてとこえる。墨色鮮しうべ。其去ざゆいと異なて。清英い肩渡撃め。行燈の火口ゆるへさしむけ。是見く知ぞと言つぞ。吾を一切ゆ絶し。京何なる繹ぞそる男。近く寄く物語きと。いへぞ

樵人を稍と。跡残攫ぐ間近く立よ。破屋よ
と涙を流し。絆の由残中上ねば。不審玉ふを道理
ろと。嚮み切腹いさせしを。小人が弟桂太郎
を怎ろ〳〵藤の里ま匿住。此柴人まくれるを。夫
ろ柴人桂太郎。毎日柴刈る暇さ。草庵ま
立寄る。烟草吸る何角と。四方山の咄し。然ひ
る功ういらひしが。今日もまと側のごと。様端ま
要懸る。種その雑談に。物の言ざま人品骨柄。想士
まを似合しかるねば。其素性残尋ろま。固く詳く

実残告げ。某強る尋向ひ。語る残問ば小人と。数胎
の一人内縁の舎弟ま。強る乳母ば統括ま。和子
まを一人の令弟あ。原い双胎る有しるば。夫人
甚く愧玉ひる。丈尼ろれの一人残ば。産下ぬと其
侍ま。古金烟の護身裏残添へる。五條の橋の上ま
潜ま捨置玉ひしを。河国の雑氏ば拾ひ取て。人と
をゐし集せろん。ろ知るるれど。
和子と奇しき。護身裏残持る人こそ。其人を。
裏の中ま氏素姓。生月日の出紀あ。家ろ人を

知り食はねども。現世の同絶るれば。是御行の知恵五りく。親しくせさせ玉へと。言ふる夷様子供なり。粗覚く居たり。奴や有と云しろ。其裏様当りに。雨迯バよりく。ぞくもの紀。我舎弟ろ舎兄よと。互に名告合く後。渠が身上様巨細問へば。桂樹里の百性よ桃作と呼ふもの。年老る姫子の紀様へ。清水寺の観音よ。祷てく七日の素足結満の日観世音様拝しく願ふる。五像の桃よ捨子有し様。桃作を仏の誓ひむ。しうぞ。我く

よ授け玉ふ子よやあらんと。欲びく拾ひ取しに。あの桃が。夫妻が中よ持囃し。最愛つく育る間。不幸よしく彼夫婦へ。桂が十のとし。病く七日程伝しく。ようく。害ふるよりねども。糊口よ足しき良いるうしよ。夫婦が病中丸後の難用よ。遠る嚢中空しくあり。田畑も山も売代らして。其不足様債つ。桂が衣食ふん。足しき一人の孤なり。舎とも成ぞうしよ。其村中よ弥陀七とく。仏の者ありて。小厮よ遣ひく是し故。飢ど寒ぶ人


老母誠
東桜子と
激まる

桜子
操女

とるゝ。十四歳より京師へ出。大西どの人奉公して、善八と呼ばるゝ。去ぬる文明元年反不図我家隷呑外と喧嘩して。切害したる言訳よ。切腹せんと思ひ〳〵処操女どのよ助けらを。拠なく死を止て。故郷拙の里よ帰る。又弥陀七郎主と〳〵。樵耕〳〵日送る。武貶後身裏張ひ〳〵き。其昏紀見〳〵我身の素姓。始く知らず斯浅猿〳〵き業〳〵朽果ん夏最口借〳〵。一合取る。両刀佩る身となるらんと。思ふものゝ大恩あり。弥陀七が志意よ。

肖んこと我恐る色ぞ速よ滑も去ば。せめて彼人世よ有うちを。先も角もしゝ恩よ報ひ。其后何れの邸へ成とも。出て奉公せんものと。且暮心ひ者せうと。結て終て某が。乱世ゝる世よ安閑と。偽居する我不審うゝ問へ。まゝ我らんをも遣もふく。語て畢て思惟よ。同じ双胎よ生をみがら。吾俤と変て拙分が。身の不幸の甚しく。憂艱難〳〵何我孤我さん。抱弁へ〳〵とる仏操よ。感仏〳〵痛まし〳〵。顔も形もよく似ゝ生ぞ。家尊大人とて滑

もとより紀玉入ことと社まじ。左もとを彼ゐ家残縄せ。我まゝ渠ゐ成換とく。弥陀七ゐ奉公し。渠ゐ苦労を援々んと。思へどゝくと明く地ゐ。告るをねこそ肯まじ。歎きて代らんものと。思業残きとめく汝ゞ栖拙の里ゐ古乃苑どの残。匿義おく栗六ゞ。栖と内ゞ里ゐ色ゐ。我若汝ゐ成代て。弥陀七ゐ夏ゐば。側室を守護ゐ便宜よし。汝を吾ゐ成ゐゐ。此処ゐ頃居く色ばやと。言きこえしゐゐ。おん身のゐ。便とゐ紀夏ゐゐ。何ゐゐ間辞来つん。

然色ども彼処へ社玉たゞ。逆ゐ仕ゐる色玉そざ。山野の働の苦しゐんと。言へども夫ゐ忠義のため。ゐしも厭ゐ某ゐばと。吾心中の様密をゞ。渠ゐ悪言ふくゐ互ゐ衣裳残脱若ゐえく。互別色んとゐゐをゐゐ。家子の大人来玉ひし故。いゐゐ故ゐ不審と。一室ゐ匿色窺南すゞ。死れゞゐゐ義理の夏ゐ是。是の口惜し吾故ゐ科ゐき渠ゐ腹切ゐゐ。渠ゞ劬労残援ゐんと。却く渠ゐ氏ゐ戻残。彼らせしゐ我源ゐ。名乗く岩て吾宅ん。

紙門をあけいく度ろ。揺てをこれど。桂伝ゞ吾
を代をく先んとや。覚悟をしくん。家その大人の。
仰を応対ふれ言葉。我胸中とすが違らば。斯迫れ
弑竭れその残。吾今出くい業ゞ仏。水とやをしん
とゐひろへしく。見つ殺せしく吾しさを。鈍の峠
へ生ゐゞ。追出さるく地獄の責苦。受るくく程
苦しく。泣ども泣ぬ潜の身。出るを出るを只
一人。ゐを苦しゐ苦ろ打ろ。入来る大西桜子兄
嫌をこく我儕とゐひ。桜子ゞ節義の慈嘆後宮の

城孫弁論。理義を伏して桜子ゞ。孝貞忠義を身命
を。惜しも惜ぬ心操。一途を急る我家その大人。
利害弑殺く色を強め。不忠弑対ゞ紅計業。結を
玉ふを至るゞ。遺もなく立聞しく。数感嘆ずる
ものく。更を出るをくて。斯駆しく
せくるく。其通の趣くを。真平赦く玉とる
ゞしと。長物語を清英る。始く知さる殿様の禅是
迫締しく言へざる。妻女ゞ心のゞくさ我。感
心もしつ又憾ゐ。桂伝ゞ薄命を。養親をさへ

ふうすまゝらを。此年月の艱難辛苦。一日片時も安堵せば。偶ま内身の父親に逢ひぐ。親子の名乗を得もせば。ゆゑ知れる紙情を。潔きに操を。感じく屢嘆息に。ん紙察しゆゑ感じ。操も俱に鼻うちうと。嘆き玉ふを道理なぐ。父子の名乗紙せざりし紙。悔を玉ふい愚なて。切腹せしを清泡ぬし。只今其処へ名乗り出しを。頻る樵士の桂介ろばや。桂太郎生害あるく。其舎弟桂介ぬしと。代るを立しと思し食。愛しを玉ひなを。先立を桂介の。桂太良の亡霊もいと満足を思さんと。涙を桂太良も。後室の仰の通て。先しさる人のるいしも。今更悔く益なを夏。月陌費すい君へ不忠。既ま紛業決しれを。後室を桜子ぐ。同ん せしよし蛇塚へ報し玉ひ。婚嫁の日定てるを。疾く人〻知らし玉へ。鎌田父子其外の人へも。其由告知しく。共く縛紙謀るを。家子大人を其首級紙。蛇塚納持く行玉ひ。二ん為を紙潔白を。縛糸せざる児郎ぐ首紛取く奉ると欺き玉いを。耶

智深き蛇塚なり。誠と思ひ〳〵疑ふ石城解けぬるん。吾
も別弥陀七郎。家の奴隷二代の桂女本妻を逐く
秋月の。家督城継ぎ名城改め。桂之介と名乗りだ
し。是も我命なかりて。先〳〵桂女へ報恩なて。兎
角〳〵内春の夜の。更安々世ぞ人々も。疾く郎へ
故里迄へ。時移りわど便宜悪うて。やく〳〵と忙
し立世ぞ。実は尤と人〳〵も。花の都と桂の里へ。立
別世ぞ急ぎぬる

嵐峡花月奇譚巻之九終